

7月のGlobal Session (2023)365回目

期日:2023年7月17日(月・祝)

場所:ガレリア3階 第2会議室

ゲスト:濱田雅子さん

コーディネーター:募集中

参加費:600円(オンラインは無料:濱田さんまで)

応募先:児嶋きよみ e-mail:kiyomi-kojima@gaia.eonet.ne.jp

タイトル:濱田雅子の「服飾からみた生活文化」シリーズ 第25回

「写真が語るアメリカの民衆の装い(その5)ー1890年代の民衆の生活文化を垣間見るー」

1 はじめに

2021年11月28日から『写真が語るアメリカの民衆の装い』というテーマで、濱田雅子の「服飾からみた生活文化」の講座を開催して参りました。今回は5回目(濱田雅子の「服飾からみた生活文化」シリーズ第25回)となります。本テーマでの報告は、本講座をもって最後となります。

本講座の資料

Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion*(1840-1900), Kent State University Press, 1995, p.592

『写真が語る近代アメリカの民衆の装いーGuidebook of Joan Severa: Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900ー』(株式会社 PUBFUN 2022年4月15日) 電子書籍 アマゾン

2 要旨

本講座は、本書に掲載された1890年代の写真分析がテーマである。J.セヴラ女史は本章では52枚の写真を紹介・解説している。今回、はじめて本講座に参加される方もいらっしゃるので、以下において写真技術の発展の歴史を簡潔にまとめおく。

【写真技術の発展の歴史】

(1) ダゲレオタイプ (Daguerreotype)

ダゲレオタイプ (Daguerreotype) とは、ルイ・ダゲール (Louis Jacque Mande Daguerre, 1787-1851) により発明され、1839年8月19日にフランス学士院で発表された世界最初の実用的写真技法であり、湿板写真が確立するまでの間、最も普及しました。銀板上に直接左右反転した白黒画像を得るダイレクトプロセスである。

(2) アンブロタイプとティンタイプ (フェロタイプ)

ダゲレオタイプの写真技術は、庶民が気軽に写真撮影を出来るようなものではなく、非常に高価なものであった。湿板写真を利用したティンタイプ、アンブロタイプ写真は、高価なダゲレオタイプ(銀板写真)に代わり直接ポジ画像を見ることが出来る写真として 1850 年代以降広く普及した。

(3) カルト・ド・ヴィジット

カルト・ド・ヴィジットは名刺の代用で、フランス人発明家のアンドレ・アドルフ・ウジェーヌ・ディデリ (*André-Adolf-Eugène Disdéri* (1819-1889)) が、1859 年に発明した。最盛期は 1863-1876 年、衰退期は 1877-1880 年である。素材はアルビュメン・プリントである。

(4) ガラス・プレート・ネガティブ

ガラス・プレート・ネガティブは、アンブロタイプのすぐあとに登場したガラス乾板のことである。昔使用していた、35 枚撮りのフィルムの前身は一点ずつのガラス板であった。アンブロタイプは薬品をガラスに塗布し、それが乾かないうちに撮影したため、湿板と呼ばれたのであるが、ガラス乾板は、薬品がその名の通り、乾いた状態でガラス板についている。ネガポジ法である。この利点は、まず、どこでも写せたと同時に、現像処理をその場で施す必要がなくなったことにある。また、複数枚数を制作することも可能とした。ガラスネガティブになってあらゆる意味で写真のフィールドが拡大したことになる。

(5) キャビネット・フォトグラフ

キャビネット・フォトグラフはキャビネットに飾られたことに由来する名前をもっている。このカードは、全くの第三者の目にプライベートなポートレートがさらされるようになった時代の始まりでもある。

(6) ステレオスコープ・ビュー

ステレオスコープ・ビューは、ステレオスコープを使って覗く 3-D 写真である。同じ写真を左右に一枚のボードに貼り付け、ステレオスコープを用いて、両眼で覗くと、3-D に見える。

1860 年代の写真の大半は、ガラス・プレート・ネガティブ、キャビネット・カード、ステレオ・カードの技術が開発されたため、1840 年代、1850 年代のスタジオでダゲレオタイプの写真に収められた写真とはかなり趣が異なっている。

本書に掲載された 1890 年代の 52 枚の写真の写真技術は、これらのうち、16 枚は Glass-Plate-Negative であり、残りの 36 枚は、未記載である。本日は、これらのなかから

11 枚の写真を紹介・分析する。

1890 年代のアメリカでは、男子服のみならず、女子服もコートやケーフの外套類やシャツブラウスやスカートなどのアイテムの大量生産が可能となり、デパートが増加し、小売カタログ市場が発展した。本研究では女子服を部位別・服種別にフランスのファッション雑誌 “*La Mode Illustrée*” および “*L’art et la mode*” 掲載のファッション・プレートに観られる衣裳と比較・考察する。

さて、このような社会背景は、**アメリカのファッションにどのような影響を及ぼしたのであろうか。**J. セヴラ女史の見解をまとめてみよう

1880 年代に引き続き、郵便小包制度が発展し、モンゴメリー・アンド・ウォード社（1870 年）やシアーズ・アンド・ローバック社（1893 年）は、**カタログ・ショッピングに成功し、地方無料配達制度**は、カタログ・ショッピングとタイアップして、1896 年以降に効力を発揮した。

1890 年代は、1880 年代に流行したバスル衣裳から現代衣裳に近いものへと変わっていき、衣服の歴史を語る上で重要な過渡期である。この時代に**既製服に対する需要が一般化**し始め、女性の衣服に大きな変化をもたらし、**衣服の価値観も変わった。装飾の凝った衣服からよりシンプルな形へ移行していくのである。**ライフスタイルの変化が確実に起こり、1 人がたくさんの衣服とその種類を持つことが経済面からも可能になった。**ファッションの発信源としてパリはいまだ強い影響を与えるものではあったが、腰を細く締める傾向は、アメリカではこの時代においてはあまり見られなかった。**

しかしながら、家庭は依然として生産の場であり、消費の場へと移行してしまったわけではない。大量生産により、安価な既製服が市場に出回っていたが、**多くの主婦はパターンをミシンを駆使して、家庭裁縫によって、より最新の衣服を手に入れ、節約して暮らした。**

女性が社会に出て、仕事に従事したり、スポーツを楽しんだり、自転車に乗ったりするようになると、簡素で、機能的な衣服に対する大きな要求が出てきたのである。そこで、登場したのが、新しいアイテムのシャツブラウスである。このブラウスはあまりフィットしなくてもよかったため、家庭で容易に作ることができ、既製服を買う必要はなかったようである。

セパレートのスカートも家庭で容易に縫うことができ、綿の家庭着や化粧着やマザーハバードも家庭で、一日で、作ることができたようである。こうして、**19 世紀末のアメリカの主婦は、一方で節約して、他方で、既製服を買い求める、という合理的な暮らしをしていた。**

女性用のオーダー・メイドのスーツは紳士服の仕立て師によって作られた。

労働に携わる女性は、写真 247（看護婦）、写真 242（工場の女子労働者）、写真 262（黒人の看護婦）に見られる。写真 268 には、自転車に乗ろうとする女性が見られる。これらの写真についての J. セヴラ女史の解説は、衣服と労働、衣服とスポーツという視点から、

実に明快で、含蓄がある。

本章では、大量生産・大量消費社会に向かう、1890 年代の過渡期の様相が、中流階級から下層階級の人々が写った 52 枚の写真に実にリアルに、興味深く映し出されている。やがて訪れる 20 世紀を予測しながら、一枚一枚の貴重な写真から、アメリカ服飾社会史を読み解いて行くのは、限りなく奥深く、楽しいものである。